

みてみて、カエルさんこわくないよ！
出雲市立稗原幼稚園（島根県出雲市）

[3歳児]

幼児が見たり、ふれたり、動いたりしながら、生き物に心をよせていった事例

5月

幼児の姿(C)

科学する心のめばえ・姿

教師(T)の援助・環境の構成

「かわいい」[見る] 5月上旬

・登園時、おうちの人とのぞき込み、泳ぐ様子や不思議な物(卵)の話をする。
「みてみて、小さくてかわいいね」



・いろいろな心情体験をしてほしいと願い、生き物とふれあうきっかけ作りをする。小さなおたまじゃくしと卵を手ですくったり見たりしやすいようにタライに入れて置く。

「どこにいるんだろう？」[疑問に思う]

・小学校の外国人の先生(A)と一緒に見る。
ス:「おたまじゃくしはどこにいるの？」
C:「川！」C:「あっ、ちがった。海だ」
ス:「日本のおたまじゃくしは、変な所にいるんだね(笑)」

「知ってる」
「違うのかな」
「どこにいるの？」
(感じる)

おたまじゃくしの特徴に気付き関心をもつことができるよう、一緒に見る。
・特性がつかめる具体的な言葉をかける。
「小さな口でエサをたべているよ」

「どこにいるの？」という子どもの疑問を大切に、おたまじゃくしを自分でみつけられるよう一緒に探す。
・川・畑・用水路・田んぼを一緒に探す。

「せんせい、とって」「..イヤ」[気づく・感じる] 5/16

C:「あっ、おたまじゃくしだ」「先生、とって！」
T:「手をお椀の形にして、そーっととるんだよ」
C:「...」捕まえる様子をじっと見る
T:「自分でもつかまえられるよ。やっごらん」
C:「早くてダメ..」「イヤ..」教師の背後から見るだけ「イヤ、先生が、つかまえて」「あっ、どじょうだ」「虫が泳いでる」「カエルだ」
・おたまじゃくし、ミズスマシ、カエル、カタツムリなど子どもたちは田んぼのまわりにも目を向けて、いろいろな生き物を見つける。実際に捕ったのは教師だが、「見て見て、ぼくたちがみつけたよ！」と、得意げに持ち帰る。

「イヤ」の言葉は、どんな気持ちの表れか。
・怖い・気持ち悪い・やったことがないから..(感じる)

子どもたちは「おたまじゃくし」という名前は知っているが、実際に見たりふれたりした経験がないようなので、「自分たちのおたまじゃくしをみつけ、飼っていこう」と考えた。(おたまじゃくし飼育環境設定)

ぼくが見つけた、ぼくたちのおたまじゃくし・カエル・カタツムリだよ

「怖い」という様子が感じられるので、早急に小動物と触れることを求めず、まずは教師が手本になりながら一緒に飼育をする。関心を向け「怖くない」と感じていけるようにやさしく話しかけながら飼育をし、教師の気づいたことを「見て」と子どもたちに知らせる。

衝撃的な共食い場面に出会う[驚き] 5/20

保育室にただ一人、食い入るようにタライのおたまじゃくしを見るA児。声をかけるのもためらわれるほどに、真剣に、こわばった表情で見入っている。
A児:「どうしておたまじゃくしを食べちゃうの？」悲しい表情で話す。
「たいへん、たいへん」
エサを持って来る(5/23)

どうして、おたまじゃくしを食べちゃうの(驚き)

・見つけた姿、悲しい気持ちに共感する。
・A児の「どうして」の疑問について「おなががすいてたのかな」「エサと思って間違えたんじゃない」と原因をいろいろ想像しながら話し合えるようにする。
・エサについておうちの人にも聞いてみるように投げかける。

カエルが怖いB児 [親しみ] 6月上旬

B児:「こっちはお父さんカエル、こっちはお母さん、こっちはわたし、あれ？Dちゃん(妹)がいないよ」
T:「じゃあ、探しに行こうか」
B児:「うん！お庭で迷子になってるかも」



興味関心が広がるように小動物に関する教材や、環境を準備する。

・おたまじゃくしやカエルの絵本・図鑑
・歌・運動表現遊び・カエルの面製作など
・土・草・木でカエルの喜ぶ家作りをする
・形・大きさ・色など、様々なカエルを大きな飼育ケースに入れて飼う

自分の観察ケースをじっと見る[関心]

「これ、わたしのカエル」「見て見て、お腹が白いよ」「足がひっついてる」

私のカエル、お腹が白いよ。(気付く)
カエルはどうしてひっつくの(疑問)

「ぼくの」「わたしの」と自分の物という気持ちが強くなってきたので、個々の飼育ケースを準備し自分のカエルを入れる。

「カエルがみんな逃げちゃう！」[驚き・感動]

大きなカエル、跳び出す。
C:「カエルがみんな逃げちゃう！大きいのは先生捕まえて」
あわてながら小さいカエルを思わずつかむ。
「みて、みて、カエルがつかめたよ」[自信]
T:「すごいジャンプだったね」
C:「すごかったね」「こんなに跳んだね」
カエルになってびよんびよん跳ぶ

私カエルだよ



「みてみて」と自分がカエルになり、跳びはねたり、「ケロケロ」鳴いたりしているの、イメージを膨らませ、十分楽しめるように、見たてて遊べる場をつくる。
・平均台・マット・青シート「一本橋の下は、大きな池みたいだね」

「大雨だ、カエルさん喜んでるね」[心を寄せる] 7月

給食時の会話
「雨だったら、カエルさん暑くないもんね」

「カエルがつかめたよ！」
「ぼくがつかんであげるよ」

〔考察〕3歳児は、「カエル」「おたまじゃくし」などの名前は知っているものの、実際に目の前にすると、怖がってかかわれない、かかわろうとしない幼児もいる。この気持ちを和らげ興味関心をもたせることができたのは、教師の小動物とかかわる姿であり・焦らず時期を待つ・毎日のように小動物探しをし、興味を持続する・タイミングを逃がさず誘いかける・遊びとして楽しめるようにすることが効果的であった。

みどころ

カエルは、3歳児でもよく知っていて親しみを感じる生き物です。興味があり心が動きながらも、触れそうで触れないカエルのいる環境は、心に残る印象的な生き物とのかかわりの体験につながりました。

心が動かされていることだけでは行動に結びつかない場面でも、実態や3歳児の発達を理解して一緒に活動する保育者の援助により、子どもたちは安心して意欲的な行動をし、様々な発見や心の動きが引き出されています。豊かな感性が育まれることが期待できる経験が重ねられています。